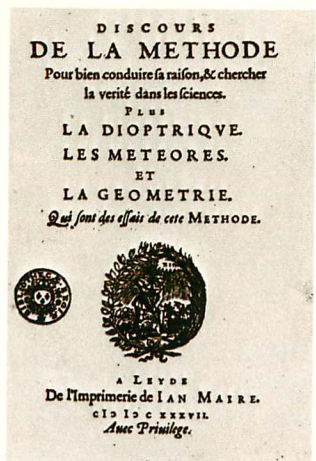


# 刊行のことば



『方法序説』初版の扉

文化遺産であるわれわれの古典は、いつでも身近におかれねばならない。しかし、それを特に求める時があるものである。デカルトの哲学がまさに今日要請されていると言えよう。心をおき忘れバラスを失った科学がその生みの親である人類に破滅をのぞかせている。人間の復活が叫ばれるのである。デカルトの調和と均衡のとれた合理精神が、正しい考え方を教えてくれるであろう。

ところで、デカルトの作品を刊行することには往々大きな困難がともなう。それというのも、周知のとおり、デカルトが思想の歴史に大変革をもたらした、近世哲学の基礎を築き上げた哲学者であるだけに、その研究もあらゆる角度からなされておられ、翻訳にあたっては、それらをふまえた上で行なわれねばならないからである。こんど、小社でその著作をまとめ『デカルト著作集』としておくり出すことができるのは、秀れた研究者・訳者がえられたからである。

この『著作集』では、『方法序説』にはこれにともなう『試論』を加え、『省察』では『反論と答弁』を付したほか、『思索私記』、『ブルマンとの対話』なども含め、またスウェーデン女王クリスティーナの求めに応じて作った舞踏劇『平和の訪れ』も収めて、『音楽論』をのぞく著作のほぼすべてを収録した。このような形でまとめられるのは、わが国でははじめてのことで、思想界・哲学界に十分貢献できるものと信じる。

## 収録内容

### 第一巻 (第2回配本)

- 方法序説 三宅徳嘉・小池健男訳
- 試論「屈折光学」 青木靖三・水野和久訳
- 「気象学」 赤木昭三訳
- 「幾何学」 原亨吉訳

### 第三巻 (第1回配本) ¥2900

- 哲学原理 三輪正・本多英太郎訳
- 情念論 花田圭介訳
- 書簡集 竹田篤司訳

### 第二巻 (第4回配本)

- 省察 所雄章訳
- 反論と答弁1 宮内久光訳
- 反論と答弁2 所雄章訳
- 反論と答弁3 福居純訳
- 反論と答弁4 広田昌義訳
- 反論と答弁5 増永洋三訳
- 反論と答弁6 河西章訳

### 第四巻 (第3回配本)

- 精神指導の規則 大出 晁・有働勤吉訳
- 真理の探求 井上庄七訳
- 人間論 伊東俊太郎・塩川徹也訳
- 宇宙論 野沢 協・中野重伸訳
- 思索私記 森 有正訳
- ブルマンとの対話 三宅徳嘉・中野重伸訳
- 平和の訪れ(舞踏劇) 川俣晃自訳

## 青木靖三 デカルトの 頭蓋骨と責任と

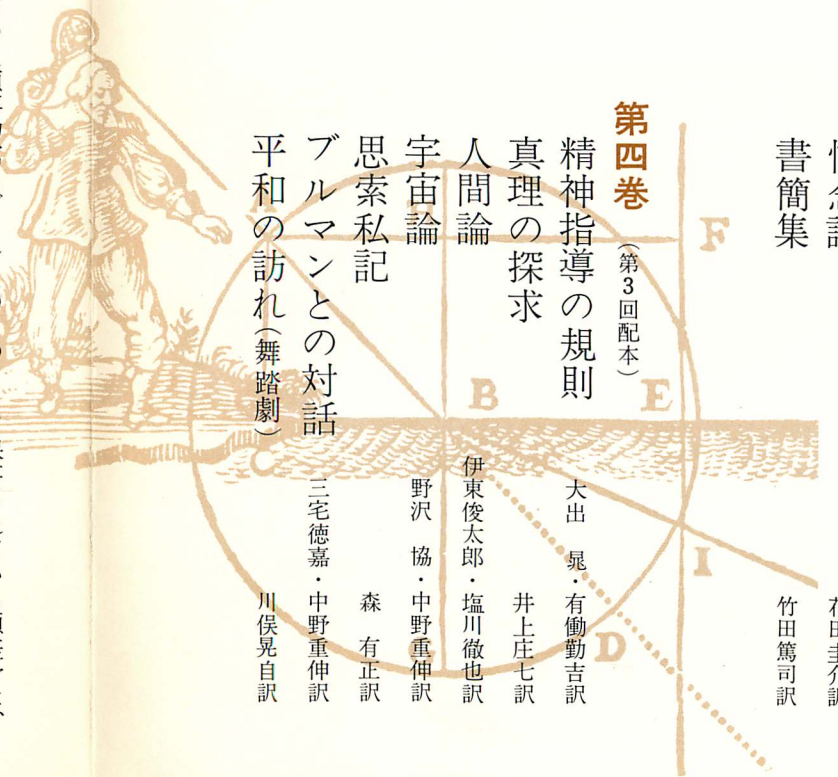
今日、シャイヨ宮の人類博物館にデカルトのものとして保存されている頭蓋骨は、かれのものであるかどうか定かでない、という話に初めて接したのはいつのことだったろうか。

クリスティーナ女王に招かれながら、肺炎で死んだ哲学者の遺体がストックホルムでの仮埋葬のち間もなくかれがあまり愛していたと思えぬフランスに帰るとき、ある人間が頭蓋骨だけを切離し他人のとすりかえる。それからさらに百五〇年ほどして、ベルゼリウスがフランス学士院の準会員に選ばれたとき、手土産がわりに人手をわたりあるいていた「真正」の頭蓋骨を持参し、それが人類博物館にあるのである。スウェーデンでの最後の買手の支払ったのは、わずか三七フランであった。

それ以来ずっとその真正性が疑われながらも、今世紀初めにある学者が肖像画などを参照して、その真正性を確認したといわれている。しかし肖像画でどの程度確かめるものなのだろうか。

話は変わるが、このごろデカルトの「責任」ということがいわれ始めている。現代における科学技術のとてもない発展と、これが社会、自然との間にひき起す摩擦、キシミを眼前にして、この発展の軌道を敷設し、出発させた最初のイデオログとしてのデカルトの責任を問おうというのである。物と精神とを切離し、物に自立した、そして現代にみられるような精神を圧倒するほどの重みを与えるきっかけとなったかれの責任を追究しようというのである。

しかしそれは、かれのではないかもしれない頭蓋骨をかれのものとして珍重するのとは裏腹な、筋違いの追及ではないだろうか。周知のようにかれは学問を一本の木にたとえ、根は形而上学、幹は物理学、三本の枝は医学、機械学、道徳論とし、このさいこのものこそ他のすべての知識を前提する最高のものとしており、肺炎のため、これを仕上げえなかったとしても、それでかれの責任を追及できるものだろうか。あるいはその著作のどこかにすでに含まれていてわれわれが見落としているだけなのか。



野田又夫

## デカルトと現代



デカルトの著作の新訳が出るようになった。古典の翻訳はそれぞれひとつの解釈を示すから、同じものの訳が重なってもよい。こんどの訳もきつと新たなデカルトの姿を示してくれるであろう。

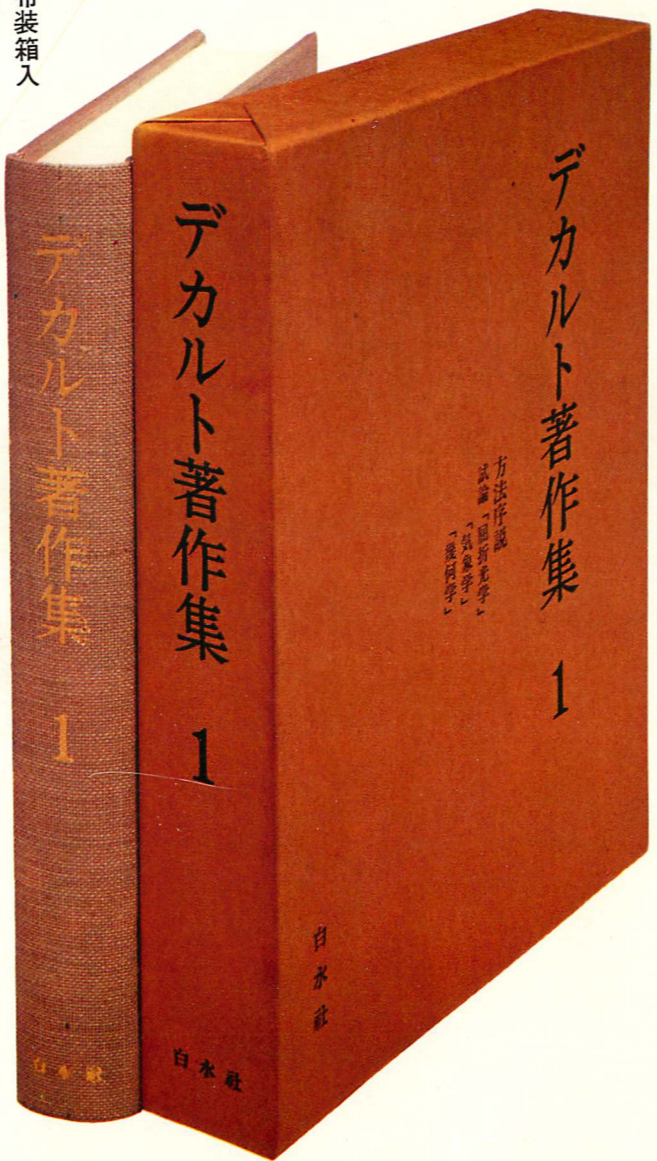
考えの上でも生活の上でもデカルトのスタイルははつきりしている。大分遠い時代の人だが、少しゆっくり見ていると、いろいろな点でわれわれにじかに訴えてくる。たとえばかれは死ぬ前にスウェーデンで学会の規約をつくらされたとき、研究の目的は議論で人に勝つことではなく真理を知るにある、という一項を入れた。『方法序説』でも、他人がすでにいったかどうかは問題でなく、理性が納得させることを自分はいったのだ、と誇りたい、という。至極あたりまえのことではあるが、現代のいわゆる論壇で競つてものをいう人々のようすを見ると、デカルトのことはふしぎによく利いてくるであろう。そうして論壇の議論の内容といえは、老人がデカルト哲学を近世思想の元凶だときめつけて得意になつていたりするのである。

いかにもデカルトは近世の精神を象徴する思想家であるが、その近世というのは現代をもふくんでおり、一部の論者がいうように現代が近世をもう超したり超克したりしてはいるのではない。いまの世界の東西南北を全体として見れば、それは明白である。デカルト自身は直接に政治や社会や文化を論ずることがなかったが、デカルトの考えの論結をいえば、こういうことになるであろう。若い人々にデカルトを、時間をかけてゆっくり読んでもらいたいと思う。

## 第一回配本 / 3月上旬

### 第三卷

哲学原理  
情念論  
書簡集  
定価二九〇〇円



体裁 II A5判 総布装箱入  
組方 II 本文9ポ一段組  
平均四五〇ページ  
配本 II 毎月一冊ずつ配本  
予価 II 二九〇〇円 ~ 三二〇〇円

101 東京都千代田区神田小川町三の二四  
振替東京三三三二八 / Tel(291)七八二二(代)

白水社

白水社

# デカルト著作集

全四卷